



棚

田

ライステラス

第59号 2011.12.20
(年3回発行)

発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会
編集/ふるきやらネットワーク
〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3チム石塚内
TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

全国棚田(千枚田)連絡協議会

特集・第17回全国棚田サミット

檜原の棚田では上勝小学校の子どもたちが作ったかかしも出迎えてくれた



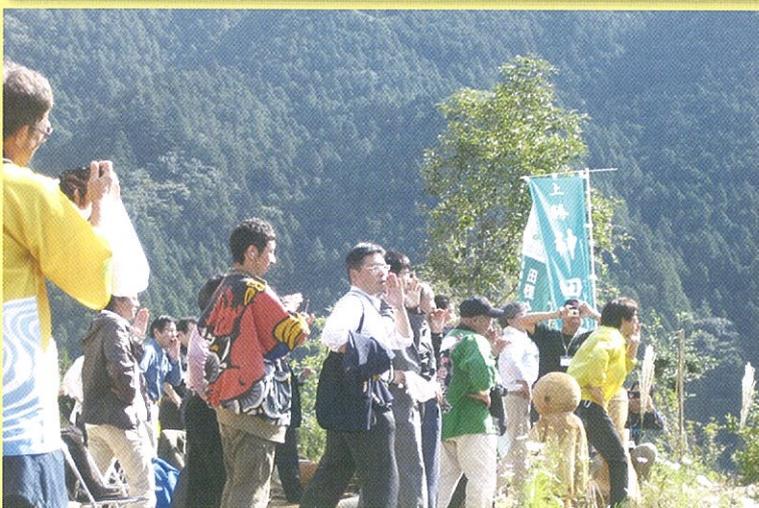
標高500m以上の棚田は庄巻



メイン会場ではたたく4つのほり

特集は分科会、首長会議、参加者の声、地元の思い等
トピックス 富士常葉大学「二社一村しずおか運動」
災害に負けない——紀伊半島 ほか

田野々の棚田ではヤッホー調査隊の協力で思いっきりヤッホー!



はっぴを着た上勝中学校の生徒たちがお出迎え

徳島県上勝町で、第17回全国棚田(千枚田)サミット開催!

2011年10月28日(金)～29日(土)「緑の階段 みんなで守ろう 日本の棚田」

「第17回全国棚田(千枚田)サミット」は、お陰さまで無事終了することができました。関係各位の温かいご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

今回のサミットにつきましては、3つの特徴があります。

- ①人口2,000人足らずの小さな町での開催。
- ②みなさまに町内で宿泊いただくため「農家民泊」(ボランティア)を用意した。
- ③日本で最初にゼロ・ウェイスト宣言(無駄・浪費を無くす運動)を行った町にふさわしく、ご参加のみなさまにはマイボトル持参をお願いした。

このような「サミット」でしたが、棚田の保全等について有意義な討論をすることができました。しかし、棚田保全の前途は多難です。今後も継続してみなさま方のご協力をお願いしつつ御礼の言葉とさせていただきます。

第17回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会 会長(上勝町長) 笠松和市



第17回 全国棚田(千枚田)サミット

副題テーマ 「緑の階段～みんなで守ろう日本の棚田～」



【開催プログラム】

- <前 日> 10月27日(木)**
 全国棚田(千枚田)連絡協議会理事会
 情報交換会
- <第1日目> 10月28日(金)**
 全国棚田(千枚田)連絡協議会総会
 オープニング 上勝小学校の合唱「棚田へ行こう！」
 開会式
 上勝町の取り組み報告：上勝小学校
 上勝町の棚田紹介
 基調講演：徳島県知事 飯泉嘉門
 分科会 ①棚田の保全「鳥獣害から棚田を守る」
 ②棚田の価値「棚田を守る価値とその共有」
 ③棚田の活用「持続的な活用の組織と担い手育成」
 ④棚田と酒(徳島大学上勝学舎主催)酒づくりを介した主体的、継続的な棚田保全活動
 首長会議「担い手の育成」
 全体交流会
- <第2日目> 10月29日(土)**
 現地案内(椋原地区/八重地地区/市宇地区/田野々地区)
 分科会のまとめ コーディネーター：澤田俊明
 閉会式



現地案内では地元のおもてなし 中学生たちもサポート 全体交流会では阿波踊りで盛り上がった

基調講演

徳島県知事 飯泉嘉門

演題「未来へつなごう!棚田は日本の宝物 ～農山村(ふるさと)からのメッセージ～」

ゆっくりとした口調でわかりやすく、徳島県の紹介からはじまった講演。そして、中山間地域は、限界集落の増加、鳥獣被害、また耕作放棄地の問題などを抱え、「課題先進地域である」と話は進んだ。しかしながら、「とくしま農山村(ふるさと)応援し隊」といった県の協働パートナーの取り組みや小水力発電等を紹介し、「中山間地域は、課題解決先進地域へ!」と力強く提唱した。



第1分科会

棚田の保全

～鳥獣害から棚田を守る～

- コーディネーター：奥村栄朗 (独立行政法人 森林総合研究所四国支所チーム長)
- 話題提供者：西 利一 (上勝町・福原地区在住)
- 森 一生 (徳島県西部総合県民局 保健福祉環境部)
- 熱田尚子 (西粟倉・森の学校)

棚田を守る地域の共同

動物を近づけない里作りを

コーディネーター 奥村栄朗

第1分科会のテーマは「棚田の保全」。鳥獣害から棚田を守る」であった。鳥獣害の中でも、近年深刻化しているシカ害を中心に議論を進めることにした。

まず話題提供の内容を簡単に記しておく。私からは、明治維新以前、シカとイノシシという平地・低山性の大型草食獣の害を防ぐことが農業にとっていかに重大事であったかを示し、現在の被害を防ぐためにも野生動物を近づけない環境作りに集落ぐるみで取り組むことが重要であると申し上げた。

熱田氏からは、中国山地の小さな村での共同の防護柵設置やシカ肉料理の工夫など、西氏からは、地元上勝町の被害や捕獲の状況、森林でのシカ柵の設置や補修など、それぞれの地域の取り組みが紹介された。また森氏からは、適切な被害防除と個体数調整のバランスが大事であるという話があった。

デイスカッションは会場からの質問票をもとに進めたが、農家自身による捕獲についての議論と、肉資源の利用についての条件整備の要望の2点が多かった。他の機会と同じく、私がそこから感じたのは、有効な援助や指導を受けられず、本当に困っている農家の方々の「自分で加害獣を獲らなければどうしようもない」という追い詰められた心情である。

しかし、被害防除にしても、捕獲にしても、個々の農家が自分だけで何とかしようというのはとても無理なことである。

そこを認識していただいて、まず地域で共同して野生動物を近づけない集落・耕作地に変えていくことを考えていただきたい。これは基本的に地域住民が自ら実行できることなのである。もちろん、一方では動物の生息状況や被害をモニタリングし、適切な捕獲による個体数管理を行うことも必要不可欠であるが、こちらは国や県レベルの行政が早急に体制作りから取り組まなければならない課題となっている。

檜原の棚田を見学した際、案内の方が「人工林になる以前は、棚田の上部は力ヤ場だった」と話されていた。その頃は周囲の林も里山として利用され、それらが人と動物の境界領域を形成していたであろう。しかし、現在は人工林が耕作地のすぐ隣まで迫り、動物にとって格好の隠れ場所となっている。また、棚田の中には、少ないながら耕作放棄地や果樹に変わっている場所がモザイク状にあり、動物が耕作地に接近することを一層容易にしていると思われる。

一方で、普段はそれぞれの田の周囲に張り巡らされているイノシシ柵を、サミットのために取り出したのだという。棚田の景観を重視し、なるべく防護柵など見せたくないのであれば、なおさら集落の周辺に動物の近づきにくい状況を作る必要がある。積極的に捕獲して数を減らすのはその外側で、という話にできなければ、被害を減らすことは難しい。

上勝小学校の取り組み発表



「棚田へ行こう！」は宮崎県日南市、鈴木やすこさん作詞作曲。第12回の日南サミットのテーマソングとして歌われて以来、親しまれている



スタジオと現場からの実況中継という構成で、田植えや台風状況、収穫などをユニークに紹介した

上勝小学校による「棚田へ行こう！」の歌で幕開けし、開会式後、5年生が再びステージへ登壇。ニュース番組形式で檜原の棚田での活動を紹介し、見事な演技力で会場を沸かせた。最後に、「被災地を思い、ふるさとに捧ぐ歌」として合唱を披露。堂々たる姿と広い視点に立った発表に惜しみない拍手が送られた。

第2分科会

棚田の価値

～棚田を守る価値とその共有～

- コーディネーター：澤田俊明 (環境とまちづくり代表 徳島大学客員教授)
- 話題提供者：中内英夫 (上勝町・旭地区在住)
- 平井松午 (徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授)
- 平元美沙緒 (大森町グリーンツーリズム推進協議会)

価値ある棚田。新たな価値の創造も

コーディネーター
澤田俊明

◇第2分科会のテーマ

第2分科会は、「棚田の価値」棚田を守る価値とその共有」をテーマに、「棚田の素晴らしさ(棚田を守る価値)」「棚田の価値の共有」について議論した。

◇澤田報告 棚田を見る眼、小さな価値の集まり small is beautiful

棚田には、小さな良質の価値が多く存在する。「棚田の価値」を、①棚田の基盤サービスとしての価値(食糧生産、国土保全、水源涵養、景観など)、②棚田の利用サービスとしての価値、③今日的価値・意味としての棚田保全活動の価値から見ると。

「価値の見方(評価)」として、空間(棚田)と主体(生物・人間)を個別に見る「一元的な見方」と、これらを一体として見る「二元的な見方」の2つがある。また、棚田での誘発行動(アフオードダンス)の特徴、合意形成や価値共有のルール、棚田の畔に凝縮される調和などの報告があった。

◇平元報告 見えていた価値と見えていなかった価値、その探索と共有

秋田県横手市大森町では、大森町グリーンツーリズム推進協議会により、平成22年から秋田県初の試みとなる棚田オーナー制度がスタートした。オーナー制度の企画は、GT協議会、集落、行政の協働で行っており、その活動において「すごいお母さんたち」の存在と働きがある。

オーナー制度を通して棚田の価値として、地域のシンボルの存在として地元から「見えていた価値」がある。一方で、棚田オーナーが発見する地元「見えていなかった価値」

がある。価値を探し集落で共有することが、今後の活動の拠りどころとなる。

◇中内報告 外からの価値に住民が気づく

かつて八重地では、炭焼きや林業が盛んであったが、近年林業が衰退して生計が維持できなくなってきた。棚田の水はブナ林からの恵みであり、歴史的に八重地集落がブナ林を守ってきた。この棚田は、仕事があれば棚田は守ることができない。

棚田が有名になるとは考えてもいなかったが、ほ場の曲線的整備は今となっては良かった。また、にほんの里100選でも、外からの価値に住民が初めて気付いた。

◇平井報告 生活・生業としての文化的景観価値

上勝町の棚田は、全国的にも最も急傾斜地に立地し、その急傾斜地の中では棚田枚数が多い。立地条件が厳しく労働生産性が悪い中で、棚田・里山景観が比較的良好に保存されている。上勝町には、江戸期・文化10年の実測絵図が残り、現在と2000年前の棚田景観等が照合できる。

生活・生業の証しが、文化財としての「文化的景観」であり、そうした「文化的景観」の対象となる棚田は日本の原風景である。地区の景観を構成する生活・生業に関わる景観要素の成り立ちを見直し、生活・生業の「価値」の再発見をすることが必要である。

◇まとめ

棚田には、多くの良質な価値がある。これまでの認識されている価値と、新たに創造できる新たな価値があり、これらの多くの価値をたくさん共有することが求められる。

団体会員の参加から

三菱食品㈱
フードコーディネーター本部

佐々木詩緒

棚田サミットに参加して ～「かけ橋」として～



食品卸売業として、棚田保全へどのように関わることができるのか？

団体会員に加盟して以降、多々ご質問を頂いてまいりました。

三菱食品㈱は、総合食品卸売業として、缶詰類、調味料類、麺・乾物類、嗜好品・飲料類、菓子類、冷凍・チルド類、酒類などの販売を行っています。食品産業における「消費と生産を結ぶ価値あるかけ橋」として、これからの日本の食文化、その食文化を支える生活者の営み、そしてその食文化や営みを包括している自然環境を守っていく役割を果たしていかなければいけないと考えています。

その中のひとつとして、棚田のある国内各地それぞれの美しい景観は日本のふるさと原点ともいえる姿であり、その姿を保全する活動を応援するために必要な取り組みなのではないかと考え、全国棚田(千枚田)連絡協議会の団体会員として加盟しています。

現在行っている具体的な取り組みとして、新潟県長岡市北荷頃棚田、山形県朝日町くぬぎ平棚田、2つの棚田で育てられ収穫された特別栽培米コシヒカリを小売店やインターネットを通じて販売しています。また、弊社の展示会において、国産地域食品の地産全消を目的とした事業の取り組みの中の一つとして、棚田がもたらす多面的機能や美しい

第3分科会

棚田の活用

～持続的な活用の組織と担い手育成～

- コーディネーター：広瀬敏通（日本エコツーリズムセンター代表理事）
- 話題提供者：松下和照（上勝町・生実地区在住）
- 玉木有紀子（NPO法人越後妻有里山協働機構理事）
- 高山承之（NPO法人棚田ネットワーク運営委員）

棚田という農資源の活用を 今後とも広めるために

コーディネーター…広瀬敏通

棚田は効率化、大規模化を50年以上にわたって推進してきた現代日本の農政にとって、ほ場整備すらできない旧世代の伝統農業の象徴的存在となっている農環境だ。「限界集落」と一括りにされ消えゆく農風景のように思ってきた人も多かるう。ところが棚田に思いを寄せる人々は減ることなく、一時のよこに「田植え、稲刈り」だけの援農対象でもなくなってきた。

ここで、議論は、こうした活用のあり方が、20年後にも発展、広がっているために何が必要か、という視点に絞られていった。すでに事務局の澤田氏との打ち合わせで、テーマを「活用」から「持続的な活用の組織と担い手育成」というように絞る提案がされていたために、広瀬からは日本国内で3700校にまで広がっている自然学校の現況について紹介し、これら自然学校が中山間地域の担い手として多く活躍している事実や、これまでの地域社会の農協、商工会、観光協会、青年団といった定番の顔ぶれに代わり得るあらたな動きである「よそ者、若者、NPOなど」の活力を活かす地域が増えている状況も報告された。

第3分科会では「棚田の活用と持続的な活用の組織と担い手育成」と題して会場も巻き込んだ活発な議論が展開された。棚田はある時期に忽然と現れた農業遺産では無く、農山村地域の形成とともに長い歴史を歩んできた農資源であるため、その活用は農山村の地域社会全体の活用とも密接につながっている。まさに棚田の多面的な機能は農山村地域の多面的な機能でもある。

こうした動きは単に棚田の援農や体験者を増やすだけでなく、地域社会を従来型以上につなぎ直す効果も生まれていることが注目される。よそ者、若者、都市NPOを地域に呼び込むための仕掛けとしても、魅力的な交流プログラムを生み出す力を持つ自然学校やNPOなどを地域に引き込む必要があるだろう。会場からも若者たちの声を拾え、棚田への関心が世代を超えて広がっている様子が伺えた。「こんなに真剣に議論してくれるなんて！」と声を詰まらせた地元農家の松下氏に深い共感が広がって活用分科会を終えた。

景観をPRしたり、お土産やギフトとして先述の棚田米をお客様にお届けしたりしていただきます。

このような商品を介しての棚田保全の他に、中間流通という「かけ橋」であるからこそ棚田の中で保全活動を行っている人々と、外からその美しさややすらばらしさを楽しむ人々の間をつなぐ役割を果たすべきなのではないかと、上勝町の人々の温かい心に触れ、八重地の棚田の美しい姿を見て感じました。

今後ますます、各地域で守られている棚田を中心とした美しい景観そのもの、そしてその景観を守り続けている人たちの活動について社内外に発信し、関心を惹くことができようような啓蒙活動を行っていきたく考えています。



(写真：環境とまちづくり)



現地案内、八重地の棚田 (佐々木詩緒撮影)



八重地の棚田にて、上勝町のみなさんと一緒に

第4分科会

棚田と酒

～酒づくりを介した主体的、永続的な棚田保全活動～

- コーディネーター：山中英生(徳島大学大学院 STS研究部教授)
- 話題提供者：沢畑 亨(水俣市久木野ふるさとセンター・愛林館館長)
- 山下俊洋(上勝町・傍示地区在住) 田代優秋(徳島大学大学院 STS研究部)
- 坂本真理子(NPO法人郷の元気副代表理事) 森紗綾香(徳島大学地域創生センター 上勝学舎 特任助教)
- 宮井浩志(徳島大学地域創生センター 上勝学舎 特任助教)

日本の文化である、酒が生み出す棚田の価値創造

コーディネーター…山中英生

本分科会は、徳島大学の地域創生センターが主催したものである。徳島大学の地域創生センターでは上勝町との協定に基づいて中山間ビジネス創出のための人材養成拠点として上勝学舎を創設し、地域人材と学生を交えて大学院科目「ビジネスモデル特論」を毎年上勝町で開催している。

分科会は、この上勝学舎での学びから始まり、実際に上勝町で進展している、「酒造りを介した棚田保全活動」を題材としたもので、棚田の価値創造の方向性が示唆された興味深いものであった。

最初に報告されたのは、徳島県佐那河内村の市民グループ「おでんでん」である。市民グループで棚田を借りて米を作り、酒の醸造を特注する活動なのだが、彼らは棚田そのものの保全にこだわらず、純粋に酒を楽しむだけである。しかし、結果として活動は15年間、自然に継続し、会員の増加によって棚田保全の拡大につながっている。愛好による人のつながりをまちづくりに活かす手法は最近着目されているが、その好例ともいえる。

この事例が上勝学舎で紹介され、それがきっかけとなって、2つの活動が発進した。分科会ではこの2つの活動が紹介された。ひとつは地元企業が棚田米を買

上げ地酒に加工販売して好評を得ている山下氏の事例。もうひとつは棚田オーナー制を発展させた「かみかつ酒づくり隊」の坂本氏の活動である。これからの可能性を感じる取り組みといえる。

自由飲酒党総裁を自称する沢畑氏は「酒」は数ある米加工品の中でも極めて強力な産品であること。酒造りの過程そのものが「参加」を生み出す場面を多く持つとした。しかし、最も重要な成功の鍵は、日本酒の味わいへの深い愛好であると主張した。こよなく棚田と酒を愛する氏の言葉は力強い。

学舎の森助教（環境工学）は「小さな棚田」が参加の場として大きな特長をもつことを指摘し、もう一人の学舎の宮井助教（農業経済）は農業の8倍のGDPをもつ食品産業への展開と、売り手と買い手が協働生産する協働マーケティングとして特筆できる取り組みとした。それぞれに納得のいく指摘である。

米は主食であるだけに、多彩な日本の食文化を支える素材でもある。そしてその加工作業は、農を支えた地域で生まれた日本文化そのものであったといえる。加工米・食用米に政策的に区分された米作を解放して考えることの必要を感じた話題であった。

(写真：環境とまちづくり)

次年度は熊本県山都町へ

来年度サミット開催地から

熊本県山都町 農林振興課農政係 東 誠也



国重要文化財「通潤橋」

第17回全国棚田（千枚田）サミットに参加された方々、実行委員会のみなさん並びに関係者の方々、大変お疲れさまでした。特に、役員・スタッフのみなさんは、準備からサミット本番まで大変苦慮なさったことかと思えます。

徳島県をはじめ、上勝町実行委員会・関係者・スタッフの方々の棚田に対する思い、保全・活用・継承していかねければならないという思いが伝わって来ました。

さて、次年度は、熊本県山都町での開催となります。「第18回全国棚田（千枚田）サミット」は、平成24年10月19日（金）・20日（土）の2日間、「山都町中央体育館」をメイン会場に開催を計画しています。

山都町は、平成17年2月11日、熊本県の旧上益城郡矢部町と清和村並びに、旧阿蘇郡蘇陽町の三町村が合併し、誕生した町です。

本町は、阿蘇南外輪山から九州山脈の脊梁までを圏域とし、面積が544.83km²と県内屈指の面積を誇る町で、標高は、3000m〜9000mと地形的な変化に富み、多種・多様な自然と先人達の残した多くの遺産や歴史が残っています。

現地視察を予定している菅地区と峰地区の棚田は、平成11年度農林水産大臣選定の「日本の棚田百選」にも認定されています。

菅地区では、平成8年から棚田オーナー制

首長会議

（担い手の育成） 具体的な提案で有意義な議論に

コーディネーター…中島峰広（早稲田大学名誉教授、棚田学会会長）

首長会議では、過疎・高齢化が進む中山間地域、ことに棚田地域における喫緊の問題である「担い手の育成」をテーマにして議論が行われた。

議論では担い手の所得補償と各地で実施されている集団化の事例が取り上げられた。
(1) 担い手の所得補償については、担い

手が魅力を感じる所得を用意しなければ、その確保は困難という理由によるものであり、上勝町長笠松和市政氏から具体的な提案がなされた。提案は現行の中山間地域等直接支払制度の単価を10倍にせよという主張である。すなわち急傾斜の場合、水田10アール当たり21万円の直接支払を行うというもの。

その根拠は、日本の原風景ともいわれる棚田景観の維持に汗を流す農民に正当な労賃を払うべきであるという要求に基づく。その金額については、農業所得に占める補助金の比率がアメリカ合衆国50%、フランス80%に対して日本は16%にすぎないという実情から不当なものではないという考え方による。

首長会議では、この提案を受けて、全国町村会連合会が東京で開かれる時に全国棚田（千枚田）連絡協議会の正副会長とコーディネーターの中島が同行し、農林水産省に要請を行うことが決められた。

(2) 棚田地域において担い手対策として実施されている地域農業の集団化については、まず中島が3例を紹介した。

① 広島県東広島市志和町内の農事組合法人TAMUJUNO。ファーム内は出資した農家88戸の水田を全面受託してその経営を引き受けている。

② 富山県南砺市財団法人五箇山農業公社。行政が出資して設立した公社が作業受託により地域農家の機械作業を引き受けている。

③ 福島県北塩川村川前地区の集落営農改善組合。集落で組合を設立、共同作業で担い手不足に対処しているなどの事例。その他の集落営農については、佐賀県有田町、長野県小谷村の事例が有田町長田代正昭氏、オブザーバーとして参加した農政ジャーナリスト吉田忠文氏から紹介された。

また、熊本県山都町長甲斐利幸氏からは町外の住民が有機栽培野菜を利用してつくった離乳食の販売に手を貸し、担い手の役割を果たしている事例や新潟県十日町市産業観光部長山岸航氏からは総務省の事業「地域おこし協力隊」で受け入れた12名の隊員のうち、来任期が終了する3名全員がその後も担い手として十日町市に残ることを希望している事例などの報告があった。

総括すると本年度の首長会議は具体的な提案があり、有意義なものであった。

度にも取り組んでおり、10月の稲刈り時期には、「棚田ふれあい探訪ツアー」も実施され、稲刈り体験や田舎料理づくりに例年約40名前後の方が参加されています。

峰地区では、棚田を活かした都市との交流が年に数回行われています。

また、菅地区と緑川を挟んで隣接する白糸台地は、棚田や通潤用水路（国指定重要文化財である「通潤橋」）を通じて棚田を潤している水路）を含む景観等が評価され、平成22年2月22日に白糸台地全体が国の重要な文化的景観に選定されました。

これを機会に、生き物調査や地域の宝さがし、集落調査等が実施されており、各集落毎の「集落ビジョン」の策定に向け、取り組みを進めています。

3地区とも、棚田並びに棚田の持つ多面的機能をはじめ、周辺景観を将来に残すべき重要な地域資源として守っていくという気運が高まっています。

来年度、熊本県山都町へのお越しをお待ちしています。



白糸棚田



菅棚田



峰棚田

檜原

標高700m
の棚田景観

棚田学会会員
茨城県取手市
杉山行男



心配された天気にも恵まれ、檜原の棚田にジャンボタクシーで向かい、標高700mの最高点付近に到着。素晴らしい棚田景観が現れ、祭囃子と表情豊かな案山子に迎えられ、棚田では、急峻な地形を巧みに利用し、稲ばかりでなく、柚子などの果樹や有名ないりどり用の木も植えられている。

オーナー制も導入していたが、個人に加え学校や大学との連携を図り、コメ、柚子、野菜等の多様な作物を設定し多くの若者が訪れる工夫が見られ、地元を受け入れ組織の「檜原の棚田村」と「NPO法人郷の元気」の連携がうまくいっているように感じた。
現地では、耕作放棄地の管理などの課題も説明を受けたが、今回のサミット開催を契機に、ますます元気になってうまく乗り切ってほしい。



檜原の棚田での現地案内

八重地

曲線を生かした
ほ場整備の里

しが棚田ボランティア
事務局 キタイ設計棟
山口寛子



滋賀県農村振興課から委託を受け、棚田ボランティア活動の参加者の募集や広報を行っています。今回は私にとりて初めての棚田サミットで、棚田でつながるみなさまの輪にとっても温かいものを感じました。

八重地の棚田は上勝町でも最も奥に位置しています。角のない台形やおにぎりのような形が広がる田んぼは、柔らかく優しい姿でした。ほ場整備がされたのは平成14年のこと、営農の効率化のために通常は四角い形に整備されますが、八重地の美しい景観を惜しむ声を受け、曲線を生かした形に計画されました。鋭角のない田んぼは農業機械にとってもまわりやすく、水路もオープンなつくりにしたことで、合水が日光で温められて田んぼに流れこみ、農作業をしているとせせらぎが聞こえてくるそうです。



八重地の棚田での現地案内。(撮影：山口寛子)

田野々

リフレッシュでき
る癒しの棚田

静岡県松崎町
企画観光課課長
金刺英夫



「田野々の棚田」は、2000年程前の絵図にも残されている歴史的に価値のある場所である。私には五感で癒しを感じられる「リフレッシュ」のできる癒しの棚田」といった印象が残った。

棚田は、人が目にする丁度良い角度に位置し、リラクセスした状態で農山村の原風景を見下ろすことができる。また、四方を森林に囲まれていることから、森林浴効果も期待できる。高台に立って、腹の底から大きな声で叫ぶと、山びこがこだまし、懐かしさと感動を覚える。

さらに、上勝晩茶発祥の地として有名なこの地区は、初夏には棚田からの爽やかな風に乗って、晩茶の香りが地区内に漂うことから「日本のかおり風景百選」に選定されている。上勝町を訪れ、改めて農山村の重要性を認識し、将来にわたり、守り、残していかなければならないと強く感じた。田野々の棚田も、全国の棚田同様、高齢化や後継者不足に苦慮しているように伺える。しかし、現地で説明いただいた山部倍生さんの棚田を含む地域の保全活動に対する熱い思いや取り組みに感銘するとともに、心強さを感じることができた。

最後に、この見学会で温かくお迎えいただき、お世話話をいただいた地域関係者のみなさまに対し、深く感謝申し上げます。



田野々の現地案内では山びこ体験も！

市宇

市宇の
棚田見学記

個人賛助会員
新潟県新潟市
酒井英次



10月29日9時半頃、見学バスは地元の早川賢治さんのユーモアいっぱいの名ガイドを聞きながら、月ヶ谷温泉から市宇へ向かった。

「我々の市宇は、日本のマチユビチュと言われているのですよ」と早川さんの言に、我々は早くもワクワクしてきた。谷川沿いの広い道から、狭いイロ八坂に入り、ぐんぐん高度を上げてゆく(標高は400→700m)。バスを降りて、しばらく歩くと右手に観世音堂が見えてくる。眼前に棚田(面積約1ha、50枚)が見えてきた。地域おこしの中心になっている市宇婦人活動センターに着く。その隣にテントが設けられ、黄色のブルゾン姿の地元の人やスタッフがご接待に出ている。お茶、ミカンやカキモチ(餅を薄く切った揚げた大センベイ)を頂く。センター内部には、様々なイベント(音楽祭や農業、里山体験など)の写真が多く飾られ、都市部と地元との活発な交流が伺われる。

「もう少し上へ行くか棚田全体が見えますよ」との声に、車道を田畑や木々、家々を見ながらゆつくりと歩く。上部に着くと目の前には急斜面に開けた田畑が見え、谷向こうに幾重に、四国山地の山々が遠くまで見える。まさにマチユビチュだ！しばらくスケッチしたり、写真を撮っているとE先生が、「もっと上に、田への水路や山の神の祠を探してきた」と言われ、不明だった山の神の在りかを地元の人に尋ねはじめた。先生の手元を見ると、事前に配布された市宇のパンフレットがあり、そこには村の絵図(文化文政年間1803-31年作成)と現在の地図が載っていた。

そうです。約2000年前とほぼ同じ棚田や集落の景観が残っていて、絵図と現状を対比しながら見て歩けるのです。真に興味深い体験ができる市宇地区でありました。

現地案内は4カ所の棚田

上勝町の中心的な棚田4カ所へ4グループに分かれ、それぞれ1カ所ずつ見学した。榎原の棚田、八重地の棚田、田野々の棚田、市宇の棚田。参加者からの感想と現地の様子を紹介する。



(榎原の棚田にて) 田上キヨ子さん

「人口少ないところに大勢の人が来てくれて、楽しい!! 宝物がいっぱい来てくれたみたいでうれしい!!」84歳の笑顔がはじけていた。「いづれもやってくるよー」と元気に葉っぱも育てていると話してくれた。



写真上：榎原の棚田を歩く途中、NPO郷の元気が、地元の産物を販売していた

写真下：榎原の棚田では野尻八幡神社だんじり若連が、見学の間中、お囃子を演奏してくれていた



山下忠三さん、松下啓子さん
新居冴子さん(榎原の棚田にて)

八重地地区で参加者に話しかける上勝中学校の生徒たち (写真：上勝町)



八重地の棚田風景。石垣も美しい。
(撮影：山口寛子)



田野々では上勝ヤッホー調査隊とともにヤッホー体験！最高の「ヤッホー！」を叫ぶ参加者たち (写真：上勝町)



谷家シズエさん
(なかよし会会長)
(田野々の棚田にて)



「なかよし会」会員のなかには、都会からの「ターナー」者も

市宇の棚田。面積1ha、50枚の棚田。(撮影：酒井英次)



真にマチュピチュの棚田。(撮影：酒井英次)



写真上：市宇婦人活動センター横で、地元のガイドの説明を聞く参加者
写真下：同センター横には、テントが張られ、おもてなしを受けた。(撮影：酒井英次)

農家民宿「花びより」の岡本幸治さんと美世子さん
上勝町大字旭字中村116

上勝町の人口は、約1900人である。当然、宿泊先が多いわけではない。今回、「農家民宿」という一般家庭のボランティアによる協力があつた。また、「宿」として営業する「農家民宿」を増やす働きかけもあり、4軒となった農家民宿も棚田サミットを支えていた。

【農家民宿「花びより」に泊まる】

縁あって泊まった「花びより」は、町が棚田サミットを見据えて行った「農家民宿をはじめませんか」という呼びかけに応え、2011年8月27日にオープンしたばかりだった。

「ここはおばあちゃんが独りで住んでたんやけどな、病気で倒れて、わたしらが住んでる小松島市の方に来たんよ。ほいでここが空いて。お風呂もトイレもおばあちゃんのためにピンクを選んできれいにしたばかりで。そうしたら、お父ちゃんが町の広報で『農家民宿募集』の情報を見つけてな。料理好きで調理の免許もあつたから、やってみるかあつて」そう話す花びよりのお母さん、岡本美

世子さんは、海側の小松島市出身で上勝のことはようわからんと笑い、2泊目には、淡路島まで仕事に出ていたご主人（岡本幸治さん）を上勝へ帰ってくるよと呼んでくれた。

「ほやな、無理はしとらんよな。まあ、一緒にご飯食べる人が増えたと感じて、別に特別なことをしたわけでもないし、しとる感じもせんよ」

お母さん手作りの夜食の炒飯を頬張りながら、お父さんの話を聞いていると、特段何かが起こったわけでもない日常の延長線上のなかにいる自分が心地よくなつてくる。

【おまけの「上勝タイム」】

「今日は開会式に分科会、交流会と一日中建物のなかで疲れたあ。待ち時間が多くてね」などとぼやいていると、「上勝の人は待つのが苦にならないのだ」と話が続いた。極端な例だと思いが、おばあちゃんは1時間に1本のバスに乗るために50分前からバス停で待っていたりするのだという。お母さんが言う。

「山の時間感覚よ。待つのはあたりまえやから、みんなそれを嫌だとは思わんやいなあ。悪う思わんといてえ」

「で、その待つているあいだ、みんな何しているんですか？」と聞くと、「ほやなあ、人としやべりよるなあ」とお父さんが教えてくれた。

なるほど、待ち時間とは「おまけの時間」なのだ。サミット会場でも待ち時間を上手に利用した人は、上勝を堪能できたといえる。逆にイライラしてしまつたら、おまけの時間を失つたことになる。こうした話を聞けたのも農家民宿に泊まつたおかげだった。

【安堵感ある農家民宿】

サミットのあいだ、4軒の農家民宿への送迎を引き受けていたのは1台のワゴン車だった。農家民宿泊者ばかりが乗り合わせた車のなかはやはり宿の自慢話で盛り上がる。「食事がすごくおいしかった」「お年寄り夫婦が2人でやっているのに、いたれりつくせりだった」「朝見たら、山が絶景でね」「朝は釜で炊いたご飯でし

たー」……。

農家民宿でほっとする時間をプレゼントされたようなものだった。ホテルや旅館の個室で一息つく解放感とは異なる安堵感。人が人と出会い、受け入れてもらったときに心の根っこで感じる安堵感である。

「よう、ここまで来てくれたな」といった気持ちも伝わってきて、「ああ、来て良かった」と思える。こうした安堵感を軸に人が人と出会うことを可能にする農家民宿は、棚田サミットにおいて、その地域を知りたい、地域の人と出会いたいと願う参加者（来訪者）にはもってこいではないだろうか。

そのほか、農家民宿では農作業やそば打ちなど体験メニューもある。普段はこうしたメニューを楽しむに来る人も多い。農家民宿は生活の延長線上にあるが、農山村が持つ多様性に満ちたその日常は、来訪者には格別なる非日常の時間をもたらしてくれる。

◎

サミットは会場だけで行われているのではなかった。参加者にとっては、その町へと入っていく道のりや、山の奥へ奥へと進んでいく車窓の風景からすでに棚田サミットははじまっている。宿泊も印象を変えたりもする。

一方で地元もずいぶん前から準備し、広域で人々がかかわっている。棚田サミットを機に農家民宿が増えたというこの事実一つを取つたとしても、棚田サミットは、町の随所で生まれる小さな活性化のきっかけとなっている。小さな活性化が生まれてゆく力強さを、農家民宿に泊まつて味わうことができた。

（石井里津子記）

レポート

農家民宿の可能性



農家民宿「里がえり」 上勝町大字旭字葉利27-2



農家民宿「わかか」 上勝町大字正木字六十六48-1



農家民宿「山換」 上勝町大字生実字下野81-1



上勝町に多い、地元のスギ板を使った家 サミット2日前にできたという案内看板

第17回全国棚田サミットを終えて——地元農家の思い

3人の全国棚田（千枚田）連絡協議会個人正会員がいる上勝町。分科会全体コーディネーターを務めた徳島大学客員教授の澤田俊明氏、そして第3分科会の話題提供者として、地元榎原の棚田の取り組みを紹介した松下和照氏。もう一人、平成7年に高知県梛原町で開催された第1回全国棚田サミット以来、榎原の棚田から棚田保全の気運を引っ張り続けた谷崎勝祥氏（昭和13年生・73歳）である。

谷崎さんは「上勝町で棚田サミットを開催したい」との思いを温めてきた。「第1回は、上勝町からの参加は自分と6歳先輩の同郷の志（平成16年病没）、そして自分が声をかけた地元新聞の記者さんの3人だった」



マイクを手にし、榎原の棚田を案内する松下和照氏

谷崎さんはそう振り返る。その後、上勝町も全国棚田（千枚田）連絡協議会会員となり、平成11年に榎原の棚田は「日本の棚田百選」にもなった。毎回、棚田サミットでお会いするたびに「上勝町でもやりたいなあ」と語り、「今年は地元の仲間が来ました」、そして「今年は町会議員さんが参加してくれました」と年々、声が力強くなっていった。

途中、50代で煩った脳梗塞を再発しながらも、思いは枯れることなく、平成21年には「やっと上勝町での開催が決まりました」と満面の笑顔を見せた。

上勝町サミットが終了し、谷崎さんには何が見えているのであろうか。まだ、地区や町全体の反省会が開かれていないというなか、地元の反応などを中心に聞き出した。

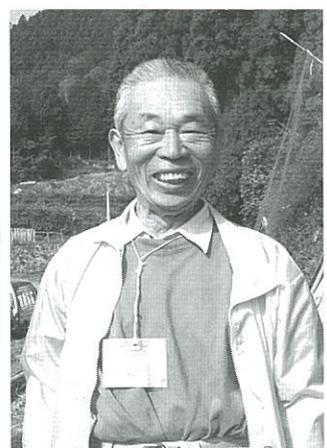


「うれしゅうてかなわん」という人も「いろんな人と会えるのがサミットのええところやな。行政や全国のお百姓さんとも会える。今回、うちの母ちゃんも榎原へ向かう車のなかで、にわかガイド」させてもらったんやけど、北海道から参加した人と交流が生まれて、

いまも手紙とかやりとりしよるなあ」また、榎原の84歳の女性は「若返ってきた」という。「彼女は『うれしゅうてかなわん』ゆうとるなあ。大勢が来てくれたんがうれしいゆうて」

榎原地区はわずか17戸。榎原へ見学に行った人は、棚田へ辿り着くまでの道のりに驚いたはずだ。細く曲がりくねった急な山道がぐるぐるの続き、スギ林のなか、上へ上へと登っていく。車1台がせいぜい通ればよい道幅で、カーブがきつかるうが、岩が迫っているように地元は平気とばかりにガイドレールなどない。一歩間違えば、谷の底へ落ちてゆくような道だ。その先にぽっかりと集落が現れる。

険しい山の上で棚田を耕し続けることの凄さ。この山道を幾度も通り、毎年棚田サミットに顔を出し、17回目にして多くの人をここに招いた重みが伝わってきた。だからこそ、訪れた人も受け入れた人にも感慨深いものが残る。これは榎原地区だけに限らない話だ。冒頭で紹介した松下和照さんは、第3分科会の最後に感極まって涙した。「自分の地域の話をもみんなに聞いてもらって、うれしかったんやろう」。谷崎さんはそう説明する。



榎原の棚田を守り続け、上勝サミットの立役者である谷崎勝祥さん

「まづき」をつつらに磨く

「せっかくなかったサミット。次へつなげたいなあ。反省会をやって、オーナーさんを巻き込めば良かったとか、説明はこうした方が良かったのいろんな声が出てくれば、次への勉強になる。今後は、古い絵図をもとに棚田ウォーキングもやっていくだろうから、サミットの経験を生かすことで、ガイドの仕方も考えられる。『まづき』の作業をする必要があるなあ」

「こつちの言葉で、玄米を1回精米機でついて、それをもう一回つくことを『まづき』って言うんよ。たとえば、あんまりおいしくなかった米ももう一回ついて、『まづき』したらおいしくなる。サミットも同じ。もう一回話し合うことでより磨かれるゆうことやなあ」

棚田サミット後に「まづき」をする。つまり、いま一度考え、掘り下げることとで、棚田サミットがますますおいしくなるというわけだ。

上勝町の山深く谷深い風景に、山ほど高く、谷ほどに深い地元の思いを重ね見るようだった。

（インタビュー・文：石井里津子）

声 はっぴ・はっぴ・ハッピーがいっぱい!

平成24年度の開催に向けて熊本県山都町のみなさん



後藤孝徳さん

白糸第1自治振興会副会長

私は九州のヘソの町で通潤橋の水が潤す棚田で育ってきました。今まで棚田サミットには、参加したことがありませんでした。初めてみなさまの中に入っていた時、会場の熱気に少し圧倒されたことを思い出しています。

上勝町、もみじの葉っぱビジネスなどいろいろ聞いていましたが、わくわく感を圧倒する山並みに、ただ息をのむばかりでした。人が自分の生まれた所で生きていくことのすごさを、八重地の棚田から開けた南の空を見て、感じたところです。

人は、住む所を山から海の方に出たと、ある先生から聞いたことがあります。山の恵みがある、それを生かす上勝町のみなさまに感謝して、来年は山都町の棚田で全国の皆様とお会いできますことを願っています。



西林輝昌さん

あらぎ島景観保全保存会 会長

初めての参加でした。分科会やまとめなど先生方の話がすばらしかった。年寄りが伝承してきたことをいろいろな観点から論理的に説明し、こうした話を聞くことで、若い人たちが農業を継ぐようになると実感しました。

また棚田サミットは、神社の祭りとは違った「新しい祭り」じゃないかと思いました。棚田で苦勞している仲間が全国にいっぱいて、1年間がんばってお米作って収穫後に集まり、みんなで分かち合う場です。そして平成25年度は、和歌山県有田川町での開催です。おもてなしの気持ちいっぱいがんばります。ぜひ、来てください(談)。

全国棚田サミットの風物詩ともいえるのが、全国各地の棚田保存会が着るはっぴの数々! 百花繚乱とばかりにはっぴが会場を彩ります! 今年はそんななかから参加者の声をお届けします。



平成25年度開催に向けて、和歌山県有田川町のみなさん



栃木県那須烏山市からも参加

堀江豊水さん 那須烏山市農政課主幹(写真右から3番目)

私は宮崎県日南サミットから参加していますが、毎年楽しみにしています。他県の方々と交流ができることは大切なことだと思っています。地元、国見の棚田保全会も楽しみにしていて、来年の熊本県山都町サミットに向けて参加する方向で話し合いがされています。



広島昭作さん

大中尾棚田保全組合代表

- ①大会会場の決定について:大会場は上勝町ではなく、徳島市で開催し、現地見学を上勝町で実施すれば、あれほどの混雑はなかったと思います。
- ②大会のメインイベントである分科会の進行について:第2分科会は、棚田の素晴らしさ及び棚田を守る価値の共有について。パネルディスカッション方式で進行されたが、コーディネーターの独壇場で参加者の意見はほとんど聞くことなく進行され、不満で今後、十分検討の余地あり。
- ③大会の目的と役割について:大会の目的は今後地域の存続のための論議と役割として、今なぜ中山間地域の農地が必要か広く国民に理解をいただく役割があります。大会の目的と役割が不十分であったと思います。



第14回棚田サミット開催地・長崎県長崎市、大中尾棚田のみなさん

第16回棚田サミット開催地、静岡県松崎町のみなさん

昨年、富士常葉大学の学生で松崎サミットのスタッフを務めていた豊嶋さんが、今年は「松崎町地域おこし協力隊」となり、町スタッフとして参加!(写真上右)



第9回棚田サミット開催地、岐阜県恵那市坂折棚田保存会も!

第7回棚田サミット開催地、石川県輪島市白米千枚田からも!



小山舜二さん 鞍掛山麓千枚田保存会会長

- 参加について:保存会としては棚田連絡協議会の団体会員ではないため、参加受け入れの回答が得られず、交通機関(観光バス)の申し込み、参加者の人数調整等でサミット間近の19日まで不安の連続であった。来年の熊本県開催時も同様な扱いなら参加できなくなる可能性が高く、残念である。
- 分科会の結果から:話題提供者の多くが地に足のついた発表に乏しく、不満を感じた。傍聴者からの声を聞くことのできる分科会を望む。
- 交流会は過去のサミットに比べ最高の雰囲気味わった。
- 景観的文化財指定地「檜原の棚田」見学から景観的文化財指定に意欲を得た。



第11回棚田サミット開催地、愛知県新城市(旧鳳来町) 四谷千枚田のみなさん



参加者の



古澤家光さん 坂元棚田保存会会長(写真左端)

上勝町のみなさん大変お世話になりました。今年は東日本大震災をはじめ水害など自然災害が多く、また世界の人口が70億人超となる時期でしたので、食料の安全性と量に関心を持ち参加しました。彩りの町(葉っぱビジネス)にも関心がありました。上勝町の杉檜林、清流に感動しました。交流会では、棚田米で造った日本酒も美味しく、地元の食材で普段着のままの手料理が最高でした。獣害対策の分科会に出席しましたが、地域の人口が減少し、獣害の悩みは一緒ですね。いい知恵があったら教えてほしいものです。現地視察は「檜原の棚田」に行きました。ユズと柿の古木「ふるさと」のイメージにぴったりです。地域のみなさんからいただいたおにぎり、神楽ありがとうございました。残念だったのは、もう少し「葉っぱビジネス」の話を聞きたかったことです。



第12回棚田サミット開催地、宮崎県日南市坂元棚田保存会のみなさん



長崎県波佐見町鬼木の棚田からもやってきました!

棚田はどこに行っても懐かしさを覚える。やはり自分が田舎生まれで、田んぼの畦に置いたかごの中で子守をもらい育ったせいであろう。当時の田舎はどこも家庭も貧乏で、お百姓さんは必死になって働いたものであろう。両親のくつろいだ姿などは元旦くらいにしか見られず、もう1月2日は仕事始めなどと言って田んぼに出たものである。

渋江耕造さん 鬼木棚田協議会

そういう苦勞を知っているので、何とか棚田を守りたいという気持ちでサミットにも参加しているが、この分科会でも後継者不足が悩みの種である。今回、地元の農家の方が自分の息子が農業をしたがらないと涙混じりに発表されたが、同情する。今の世代は育った時代が違うので、特にきつい棚田の耕作は魅力どころか、精神的な苦痛になっているだろう。サミットに若い人の参加が少ないのも一つの現象である。オーナー制度も良きアイデアであるが、いつか農家に負担がかかってくるのは予想できる。棚田の活用はいろいろな意見が出たが、あくまで理想の範疇を出ない気がする。何とか継いで行く方法はないものか。食料の自給自足を認識するため、あと一回食糧難が来た方がいいのかも。来年もまた高齢者のサミットにならないことを祈りながら田を耕していきたい。



第2回棚田サミット開催地、佐賀県有田町(旧西有田町)からも!「来年ははっぴで!!」

池田勝幸さん

岳信太郎棚田会 事務局
(写真右から2番目)

- ①参加人数の限定があり、大変残念であったかな?(棚田に関心がある人の参加は特に)
- ②4カ所の棚田は、巡回式かにして最低2カ所ぐらいは見られるようにしてほしい(時間は

- は少しかけても特に)。パンフレットでは味わえないと思う。
- ③交流会の費用に対しての食材等の不足(メニュー不足)が少しあったのでは?
- ④4カ所の棚田の説明や地元の人々との交流が少なかったのでは?
- ⑤大変地元では頑張った大会だった。

第8回棚田サミット開催地、千葉県鴨川市からも参加。「来年ははっぴ着ます!!」

庄司祐輔さん 鴨川市中山間地域等活性化協議会(写真中央エンジ色のジャンパー)

県、町をあげての地域おこしの全国棚田サミットで、今までになく、行政と集落と、同じ目線に立って取り組んだ成功例、まさに感心、感動しました。全棚田を見たかったが、時間の関係で1カ所でしたが、お茶やミカン、葉っぱ等、まわりにある自然の果木を工夫し、マフラーとかコースターといった、素晴らしいアイデア。我々も常に地域の活性化とか、かっこよく話しているが、もっと足下を、地域を見ていけば、過疎化の中にも生きられる道があると勇気づけられた。米づくり、オーナー制という他力だけでなく、個々のアイデア、工夫をし、それぞれ得意なものを見い出して、これから皆で取り組み直したいと、サミットに参加させていただいて強く思いました。

ご協力ありがとうございました。



地域と大学をつなぐ 棚田保全ボランティア

富士常葉大学「一社一村しずおか運動」の実践

富士常葉大学 社会環境学部 講師 山本早苗

駿河湾を一望できる絶景の棚田景観



駿河湾と富士山を一望できる絶景の眺めを誇る西伊豆・松崎町石部地区の棚田では、昨年、全国棚田サミットが開催され、全国から多くの人びとが参加して大盛況のうちに幕を閉じた。あれから早くも1年が過ぎ、今年には徳島県上勝町で全国棚田サミットが開催され、たいへんな賑わいだったと聞く。ちょうど時を同じくして、静岡県東部の富士山麓にたえず富士常葉大学では、10月29日と30日に学園祭「エバーグリーン祭」を開催していた。

今年、本学の学生有志による松崎町石部・棚田保全ボランティア活動のリーダーを務める小磯朋之（環境防災学部3年）とサブ・リーダーの大石諒（環境防災学部3年）を中心に「MOTI団」を結成して、石部地区棚田保全推進委員会の協力のもと模擬店を出店し、これまで棚田保全ボランティアでかかわってきた石部棚田のもち米をつかって、餅つきの実演販売を行った。杵と臼による本格的な餅つきの威勢の良いかけ声と賑わいにつられて、子どもから年配の方まで大勢の見物客で人だかりができ、350食を即完売するほどの大繁盛ぶりだった。



石部の棚田米で餅つき

これまで本学の棚田保全ボランティア活動は、農作業のお手伝いに終始してしまう傾向を否めなかったが、今年をはじめ、自分たちがボランティアでかかわってきた棚田でとれたもち米を、多くの人たちに味わってもらい、棚田保全の重要性を理解してもらうことを目的に、地産地消の餅つき実演販売を行うことができた。ようやく地域と大学をつなぐ棚田保全ボランティアの考えに展開しつつあるように思う。

また、今回の売上金は、必要経費を除いて、東日本震災の義捐金および石部地区の棚田保全費に充てている。富士常葉大学では、2004年から環境防災教育の場としての棚田に着目し、地域住民と大学が連携して、地域の暮らしに根ざした持続的かつ安全・安心なしくみづくりをともに創造することを目的として、松崎町石部地区において棚田保全ボランティアに取り組んできた。2007年には、都市・農村交流を促進して企業や大学の地域貢献



棚田で夏の草刈り。水田に分け入って丁寧に草取り

を支援する静岡県の「一社一村しずおか運動※1」にも認定されている。本活動は、学生たちが学び育つ場として棚田をとらえ直し、地元有志からなる石部地区棚田保全推進委員会の指導を受けながら、一年を通して棚田を維持管理するための基礎作業を行い、高齢化の進む地元の人たちとの交流も深めつつ、先人の知恵に学び、環境および防災について考えるとともに、現代に生きる人間としての感性を養うための一助としてもいる。

棚田オーナー制度を維持するためには、田植えや稲刈りのようなイベント性はないが棚田農業に欠かすことのできない重要な農作業が多くあり、オーナーの都市住民が参加できない農作業のお手伝いを学生たちが担っている。年に3回（各2泊3日）、地元の人たちの指導と民宿の女将さんたちの協力のもと、棚田農業でもっとも重要な「あぜ付け」・「あぜ塗り」・「草刈り」の農作業のボランティアを実践している。毎回、約50名の学生が参加し、実践的教育の場として、また地域活性化に向けた地域交流の場として非常に重要な機会となってきた。

※1 下記サイトにて、「一社一村しずおか運動」の詳細について紹介されている。
<http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-630/issyaisson/index.html>

【徳島の棚田一覧】

名称	場所	名称	場所
1 大田井	阿南市大田井町宮平	22 奥野々	佐那河内村上字奥野
2 へ辺川	阿南市福井町辺川	23 江田	神山町上分江田
3 たか開	吉野川市美郷字大神	24 石堂谷	神山町神領谷
4 奥日開谷	阿波市奥日開谷	25 いしづつ出羽・棚平	那賀町出羽、棚平
5 日進	阿波市引地	26 拝宮	那賀町拝宮
6 西の岡	阿波市西の岡	27 陸谷	那賀町陸谷
7 森遠	美馬市木屋平森遠	28 くぼさの谷	牟岐町灘字上浜辺
8 下影	三好市井川町井内下影	29 ふどの	牟岐町橘字ふどの
9 井の久保西	三好市池田町白地井の久保	30 山の神	美波町山の神
10 佐野境谷	三好市池田町佐野境谷	31 新発谷	美波町赤松新発谷
11 佐野高毛	三好市池田町佐野高毛	32 寒ヶ瀬	海陽町平井寒ヶ瀬
12 坂本旭谷	勝浦町大字東谷・犬伏尾	33 お小川	海陽町小川口
13 与川内	勝浦町大字三深字宮平・押栗	34 くまの原	海陽町小川字西桑原
14 中立川	勝浦町大字棚野字中立川	35 久尾	海陽町大字久尾字陸
15 生名	勝浦町大字生名字平岡と中道	36 大屋	つるぎ町半田字天皇
16 榎原	上勝町大字生実字榎原	37 おが	つるぎ町貞光字岡
17 八重地	上勝町大字旭字八重地	38 ひろ	東みよし町加茂
18 市宇	上勝町大字旭字井ノ谷	39 たきのした	東みよし町加茂
19 野々	上勝町大字旭字堂平	40 山の	東みよし町加茂
20 東府能	佐那河内村上字野神原	41 岸下	東みよし町大字東山
21 中畑	佐那河内村上字久保井		

とくしまの棚田



徳島県

平成23年10月 徳島県発行

冊子に関するお問い合わせは
徳島県農林農地政策局 農村振興課
農村環境・協働担当まで
e-mail: tanada@mail.pref.tokushima.lg.jp
TEL: 088-621-2486
FAX: 088-621-2859

冊子紹介

「とくしまの棚田」

第17回全国棚田サミットでも配布されたのがこの冊子、「とくしまの棚田」。徳島県内の41カ所の棚田が紹介されている。平成13年に同名の冊子を作成した当時は、60カ所が紹介されていたが、年々

耕作放棄されるなど、その数が減ってきたという。日本の棚田百選になっているのは、上勝町の「檜原の棚田」、三好市の「下影の棚田」であるが、冊子には別表(左)の棚田が紹介されている。

事務局 ニュース

事務局、静岡県松崎町からのお知らせコーナーです。

「緑の階段 みんなで守ろう 日本の棚田」をテーマに、10月27日から29日の3日間、徳島県上勝町において第17回全国棚田(千枚田)サミットが、開催されました。

期間中は、全国棚田(千枚田)連絡協議会会員はもとより全国各地からたくさんの方々が参加され、加えただき盛会の内に終了することができました。これもひとえに、笠松町長はじめ上勝町実行委員会、地元や関係団体のみなさまのご尽力や会員ならびに国、県、関係機関のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

サミット開催地である上勝町は、人口約1900人と四国で一番小さな町ですが、「日本で最も美しい村」連合に加盟するほか、おぼあちゃんの葉っぱビジネスや「ゼロ・ウェイスト」宣言を通じて、ごみの排出量ゼロを目指すなど、「持続可能な地域社会」の実現に向け、積極的に取り組んでいます。今回、その上勝町でサミットが開催され、棚田の維持、保全を考えたことは、非常に意義のあることだったと思います。

事例発表、徳島県知事の基調講演が行われました。その後の分科会では、棚田の保全、価値、活用、酒などをテーマに、棚田が抱える問題について、活発な議論が行われました。

また、夜の全体交流会では、地元産品を使った料理が提供されたほか、地場産品抽選会の開催、徳島県ならではの阿波踊りが披露され、交流を深めました。

10月29日には、日本の棚田百選であり、重要な文化的景観地域である「檜原の棚田」や「八重地の棚田」、「市宇の棚田」、「田野々の棚田」で見学会が行われました。いずれの棚田でも地域の方々や中学生が参加者を温かく迎え、おもてなししてくれました。本当にありがとうございました。

なお、サミット開催に先立ち開催された全国棚田(千枚田)連絡協議会総会において、平成26年の第20回全国棚田(千枚田)サミットの開催地として山形県上市市が承認されました。開催地選定委員会の中島理事および十日町市の山岸部長のご尽力に対しまして厚く御礼申し上げます。

来年の第18回全国棚田(千枚田)サミットは、10月19日から20日の2日間の日程で「風がおる、文楽と石橋の郷」熊本県山都町で開催されます。会員のみなさまのご支援、ご協力をよろしくお願いたします。

編集後記

上勝町のみなさま、心温まる棚田サミットをありがとうございました。サミットの帰り、毎年参加されている個人会員の方々と「10年後、20年後も参加しているかしら?」「這ってでも参加!」などと冗談めかして話していましたが、そんな情熱がうれしく頼もしい限りでした。また今回、うれしかったことの一つに、若くて元気な女性の参加が増えたことがあります。個人で参加の方も研究者の方も、行政の担当の方も、会社の担当として来ている人もいました。棚田への情熱は老若男女関係なしではありますが、やはり若い人の姿を見るのはうれしいものでした。また、みなさんとお会いできることを楽しみにしています。石井里津子

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

静岡県松崎町 企画観光課

〒410-3696 静岡県賀茂郡松崎町宮内301-1

TEL: 0558-42-3964

FAX: 0558-42-3183

協議会 HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

会員募集中

新しく会員になったみなさま

- <自治体会員> 山形県上市市
- <個人正会員> 萩野宏樹 (神奈川県)

災害に負けない 紀伊半島

2011年9月、台風12号は紀伊半島に上陸し、多くの地域で総降水量は100mmを超え、甚大なる被害をもたらした。土砂崩れに土石流、河川の氾濫で人命も奪われ、農地も大きな被害を受けた。紀伊半島の被害の実態を、和歌山県農業農村整備課と三重県熊野市、紀和町ふるさと公社からご報告いただいた。

台風12号により、本県では南部地域を中心に記録的な豪雨となり、土石流や地すべり、畦畔の崩壊、河川の氾濫による土砂の堆積や農地の流失など大きな災害が発生しました。農地・農業用施設被害で約1万箇所約140億円の被害が発生しています。

にほんの里100選に選ばれた那智勝浦町口色川では民家を含む棚田が土石流に飲み込まれ、棚田百選に選ばれた有田川町清水地区の「あらぎ島」では、棚田の一部に土砂が流入するとともに、用水路が被災するなど大きな被害を受けました。これ以外にも中山間部の棚田ではたくさんの災害が発生しています。

中山間地域では高齢化が進んでおり、今回の災害を発端に営農意欲が減退して離農が進む恐れがあります。また、中山間地域の棚田での小規模な災害は国の災害復旧の補助対象にならない場合もあり、復旧できず放置される可能性もあります。

農地の復旧断念は耕作放棄地を生み、山間集落の生存の危機にも繋がっていく大きな問題なため、災害復旧事業の対象にならない小規模な災害に対してきめ細かい支援を行うことを急ぎょ決定しました。「～紀伊半島大水害～まけるな!!和歌山」をキャッチフレーズに県民一丸となって復旧・復興に取り組んでいます。

(和歌山県農林水産部農林水産政策局農業農村整備課課長補佐兼事業計画班長 岡村成実)

～紀伊半島大水害～
**まけるな!!
和歌山**

右は、和歌山県が作成したキャッチフレーズのロゴ。
県民一丸という思いが込められている。
写真下は、那智勝浦町 口色川地区



和歌山県



那智勝浦町 口色川地区



有田川町 清水地区



田辺市 上野地区



丸山千枚田の水源地である丸山川の様子

三重県熊野市

9月に上陸した台風12号により、熊野市では甚大な被害が出た。台風は時速10キロの非常に遅い速度で進み、紀伊半島の山間部に長時間にわたり記録的な大雨を降らし、河川の氾濫によって熊野市や和歌山県の熊野川町などの地域で、多くの山崩れや道路の損壊、家屋が浸水した。

特に紀和町内では家屋の被害が深刻で、全壊・半壊の被害が目立ち、ライフラインが1週間近く遮断された。一方、9月4日に予定していた丸山千枚田の稲刈りの集いは、台風の進路状況を踏まえ、3日前には中止の決定をせざるを得なかった。通過後は地区全体が被害に遭い、家の片付けを行っている中で、当初、社員達も被害者の支援を行っていたが、適期を迎えた千枚田の稲を放っておくこともできず、複雑な思いの中、保存会と共に刈り取りを行った。千枚田の被害としては収穫していた2トンの米が冠水し、廃棄処分した他、水源の土砂崩れ、田んぼの崩落など、台風の爪痕が未だに残っている。

(紀和町ふるさと公社副理事長 下川勝三)



丸山千枚田の一部 畦畔の崩落



紀和町、熊野川にかかる橋



紀和町ふるさと公社の事務所裏の様子